

自分の読書生活を振り返る

〈みやざきの言の葉〉

組 番 氏名

高田さんは、平成二十四年が古事記編纂から千三百年に当たると知り、これまで読んだことのなかった神話や伝承に興味をもちました。そこで、学校図書館にあった「みやざきの言の葉」神話・伝承、民話編」という資料を読んでみることにしました。

【神話・伝承編「前文」(一部)】

今から八十年くらい前の昭和時代の始め頃まで、我が国の農山村や漁村には、たくさんの人々が住んでいました。
山から木を伐出して町に運んだり、田畑を耕して米や麦を作ったり、海で魚や貝を獲って暮らしていたのです。
その頃まで一軒の家族は、父母と子ども、おじいさん、おばあさんを含んで七、八人いました。家族が十人ほどいる家もありました。
そんな村々では、子どもたちは大人から村の神様の話を聞いたり、山や川の伝説を聞いたり、どこからか伝わった昔話を聞くことができました。
おじいさんや、おばあさんは、そんな話をよく知っていて、子どもたちに聞かせてくれたのです。
古事記という古い書物は、今から千三百年前に作られました。上・中・下の三巻になっていて上巻は、「神代」の話です。ここに書かれている神様の話を「日本神話」と呼んでいます。大昔の人々は、この世界のもとを造ったのは神様であろうと考えていたのです。
日本の神話は、「高天の原」「出雲の国」「日向の国」が舞台になっています。それで、日向の国が舞台になっている神話を、「日向神話」と呼んでいるのです。「天孫降臨」や「ニギノミコトとコノハナサクヤヒメ」、「海幸彦・山幸彦」などの話がそれです。
神話の中の神様は必ずどこかの神社にまつられています。神社も神話を伝える大切な場となっています。

(一)「前文」に書かれていることから、どのようなことが分かりますか。次のア～エまでのうち、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 古事記に書かれている神様の話には「海幸彦・山幸彦」の話が含まれないことが分かる。
- イ 神話の中の神様は昔から各家庭でまつられていることが分かる。
- ウ 昔の子どもたちは、古事記を読んで神様の話や昔話などを知ったことが分かる。
- エ 神社は、神話を伝える大切な場であることが分かる。



